

る寫眞事業の爲には、往年奉天に於ける程ではなかつたにしても、相當面倒を重ねなければならなかつた。巴里の十一月といへば陰雲低迷の時雨時節で、晴れたと思へば直ぐまた曇る。友人の斡旋で日佛銀行の一室を寫眞撮影場として借用したが、この銀行はその頃の自分の寓處とは相當距離があつた。無論照明装置などは用ゐず、太陽の光にのみ依頼する素人寫眞である。天氣を見込んで大切の本と寫眞機とを車に積んで馳けると俄に薄暗く曇つて來る。けふも駄目と諦めて引き上げると面憎くも青空になる。また出直す。また曇る。天氣と相撲を取るやうなものだ。現像して見ると嫌になる程仕損じが出るといふやうな有様で、少からず悩まされた。それでも兎も角全卷を寫し了つて、期限内に書物を返却した時にはホツとした。今東洋文庫に備附けのフィルム原板は、此の時の記念である。

この種類のこと、思ひ出で語り行けば際限もない。與へられた原稿中十枚の範圍ではその一部分の詳述も六つかしい。別に他日の探訪記に譲らねばならぬ。探訪したすべてが狭い範圍の自分の研究に役立つのではない。

(學燈四十年九號、昭和十一年九月六日)